



県病医療ニュース

〒870-8511 大分市大字豊饒476番地 TEL097-546-7111(代表) 内線7712:県病ニュース係
※当ニュースへのご意見・ご感想は県病ウェブサイトをご利用ください。

外科

ICG蛍光法を用いた 最新の肝臓がん腹腔鏡手術

近年、C型肝炎ウイルス治療の進歩によりウイルス性の肝臓がんは減少傾向ですが、肥満や糖尿病に伴う肝臓がんは増加傾向です。また、大腸がんなどからの転移性肝臓がんも増加傾向です。当院では、年間60-70例と大分県内では最も多くの肝臓がん手術を行っています。

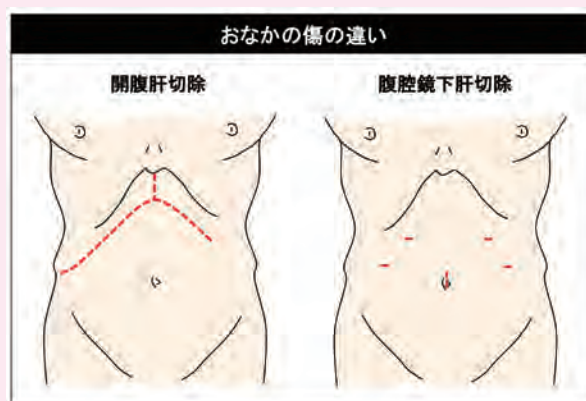
肝臓がんの手術方法は、①開腹手術、②腹腔鏡手術に大別され、開腹手術は従来のお腹を大きく開けて行う手術です。肝臓は人体最大の臓器で、開腹手術では腹部を20~30cm切る必要があり(図1左)、患者さんに負担がかかります。近年、この負担を軽減しようと腹腔鏡手術が普及してきました。腹腔鏡下肝切除術は、まず2~3センチの小さな傷を複数箇所開けます(図1右)。その一つにカメラを挿入して、モニターを見ながら、他の傷に長い棒状の専用器具を挿入してマジックハンドのように動く鉗子を使って手術します。小さな傷で済み術後の痛みも少ないため体への負担が少

なく、早期退院が可能です。当院では大分県内でもいち早く2008年に腹腔鏡下肝切除術を導入し、近年では肝臓がんの約2/3の手術は腹腔鏡下に行なっています。また、2017年に最新の腹腔鏡手術システムを導入し、より鮮明な画像を見ながら安全で精密な腹腔鏡手術ができる環境を整えています。

腹腔鏡手術では、直接手で触れて腫瘍の位置を確認することが困難です。当院では最新の腹腔鏡手術システム導入に伴いICG蛍光法が可能となり、通常光では認識できないような肝臓がんを視認できるようになりました(図2)。これにより高精度で患者さんに負担の少ない肝臓がん手術を提供しています。

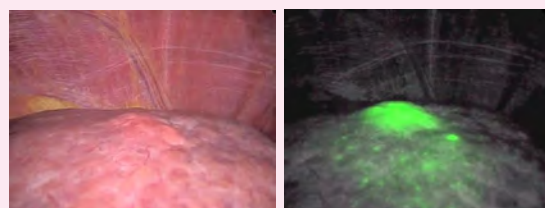
(上記の手術には患者さんの病状によって、適応の判断が必要となりますので、詳しくは当院外科の主治医にお尋ねください。)

図1 手術時の傷について



開腹手術では大きな切開が必要だが、腹腔鏡下手術では小さな傷で手術が可能となる。

図2 ICG蛍光法を用いた肝臓がんの確認



通常光では不明瞭な肝腫瘍だが、ICG蛍光法では緑色の発光として確認でき、より確実な手術が可能となる。

(外科 川崎 淳司)

県病専門看護師シリーズ

その6

災害看護県病専門看護師

災害への備え

県立病院の役割と災害への備え

当院は災害拠点病院に指定され、災害時には救護活動において中心的な役割を担う病院として位置づけられています。そのため、今後起こり得る大災害に向け平常時から備えの充実を図っていく必要があります。

当院では年に2回、大規模災害を想定した傷病者の受け入れ訓練や職員の登院訓練を関係機関と連携して行っています。また、できるだけ多くの患者さんの命を救うために治療や搬送の優先順位を決定するトリアージ法や、災害を模擬体験できる災害図上訓練の研修会などを実施し、職員の知識と技術の向上に努めています。

今後もさまざまな災害を予測した訓練や勉強会、備えの充実を図り、災害に強い県立病院を目指していきます。

個人でできる防災対策

地震や水害などの自然災害はいつどこで起きるかわからず、常日頃から防災対策を講じておく必要があります。防災対策の基本は「自分の身は自分で守る」ことであり、平常時からしっかりと備えておくことが重要です。

災害への備えについて、個人で何ができるのかを考えてみましょう。

災害への備え

- ・ハザードマップによる被害想定の確認
- ・避難場所と避難場所への経路の確認
- ・非常持ち出し品の準備
- ・家族との連絡方法の確認(SNS、災害伝言ダイヤル171、災害伝言板など)
- ・家具の転倒、落下防止



(災害看護県病専門看護師 西 由香里)